

日本語・日本語 教育を研究する

第22回

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマは「流行と日本語教育」です。



大阪外国語大学教授 小矢野 哲夫
こやの てつお

流行語と日本語教育

流行語と日本語教育

海外在住の日本語学習者で、最新の日本事情を知る一つ的手段として流行語に関心を持つ方が少なくないと聞きます。実際、日本の現代事情や文化を紹介する授業で流行語を取り上げるのは、一つの有効な方法かもしれません。流行語と日本語教育は直接的に結びつく必須の関係にあるとは言えませんが、上級以上の授業の中で、流行語が出てきたときの対応として、流行語をどうとらえるかといったことを述べたいと思います。

流行語は世相を表す

新語はそれ以前にはなかった語ですから判定が容易で、現代用語集の年次版に載っています。しかし、ある語が流行語かどうかの認定は難しい問題です。多くの人が知っていてよく使う、目立つ語、耳に残る語といったことが一応の基準ですが、お墨付きが与えられるわけでもありません。自由国民社の「日本新語・流行語大賞」や「電通 消費者情報トレンドボックス 広告景気年表」が一つの目安になるでしょう。しかし、流行語かどうかの認定よりも、ある語がどのような背景で使われているかを知ることが大切です。

流行語は、ある時期、政治・経済・社会・文化・芸能などの分野で使われるようになった言葉が、広い地域で多くの人々に一定期間、使われたものです。このような言葉はそのときどきの世相を表しています。

「ま、いっか」「だよー」は流行する以前からごく普通に使われていましたが、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件が起きた1995年に、和製ラップのタイトルと歌詞として使われて一躍流行語になりました。安全神話が崩れたこととこの言葉の流行には不釣り合いな共存という世相を見ることができます。

平成大不況は回復の兆しが見えません。「首切り」「解雇」と呼ばれていたことが、1993年ごろから盛んに「リストラ」と言われるようになり、現在に至っ

ています。しかし、この言葉の陰には、リストラされた人や、その家族がいます。言葉に注目するとともに、関係する人々のことも考えてみる必要があります。流行語は単なる言葉の問題にとどまりません。

古い話ですが、1932年の経済不況によって農漁村に20万人の「欠食児童」が出ていると発表されました。これを契機に、学校給食が実施されるようになりました。この言葉は、筆者が小学生だった1950年代後半から60年代前半のころ、母がよく使っていました。流行語でなくなってからも庶民の間では普通に使われていたものと思われます。食べたくても食べられない子どもがいたのです。飽食の時代の現代では死語ですが、言葉の背景と切り離すことはできません。

1988年の流行語だった「フリーター」は2001年度の『国民生活白書』で「高卒無業者とフリーターの増加」というコラムを設けるほど増えました。文部科学省も2003年6月に「キャリア教育総合計画の推進」の中で、「より高度な知識を習得したいフリーターへの支援」「就きたい職業・やりたい職業を見つけないフリーターへの支援」などを打ち出しています。もはや、流行語扱いができない深刻な事態です。

このように、流行語には、流行が終り、現象もなくなると使われなくなるものもあれば、一般語になって国語辞典に登録されて使われ続けるものもあります。単に言葉だけの問題にとどまらず、それが流行した、あるいは発生したときの世相及びその中で生きていた人々と関連づけて理解するべきものだと思います。

言葉の背景的知識の教育

日本語教育で語彙指導が行われます。そこではもちろん語彙の意味が説明されるのですが、言葉には使われてきた歴史的背景を強く帯びているものがあります。流行語はまさにそれです。こういう言葉を、特に上級レベルで指導するときには、世相と

いった歴史的背景の知識も盛り込むと有効です。

日本語教師は幅広い知識を身につけていることが理想ですが、流行語というところがか軽く浮ついたものだという先入観を持っている人も少なくないのではないのでしょうか。しかし、ビデオ教材や生の読解教材を使うときには流行語が多かれ少なかれ出てきます。流行語だと意識されなくなった言葉もあるでしょう。ここで語彙の意味だけを教えたのでは教育効果としては不十分だと言わざるをえません。背景知識も導入することになります。すると、単なる語彙指導から日本事情的な展開になることも予想されます。

流行語とジェンダー

日本国際教育協会(AIEJ)のホームページに「平成15年度日本語教育能力検定試験実施要項に基づく公開用問題」があります。その中に、こんな問題がありました。

『OL』は若い女性事務員を指す和製英語である。この『OL』という言葉はいつ頃から使われるようになったか。次の1～5の中から一つ選べ。

- 1 1940年代 2 1950年代 3 1960年代
4 1970年代 5 1980年代

正解は「3」です。なぜこんな問題が出題されたのか、日本語教育能力とどんな関係があるのか、と少し疑問に感じました。しかし、「出題のねらい」を見ると、これは「ジェンダー表現」の問いの一つで、「ジェンダー表現に対する知識や言語感覚を問うとともに、ある種のジェンダー表現の時代背景についても問う問題」だとのこと。『OL』という語を「ジェンダー表現の時代背景」においてとらえようというものだったのです。単に1960年代の用語であるとして片づけてしまえません。流行語とジェンダー問題が直接的に結びつく例は多くありませんが、言葉とジェンダーは今日的な重要な問題で、日本語教育でも避けて通ることはできません。

流行語の調査

ところで、『OL』という語の由来や出現時期を知るにはどうしたらよいでしょう。

新語や流行語の辞典や書物を調べるか、インターネットの検索エンジンで検索する方法があります。辞典や書物が簡単には手に入らない海外在住の日本語学習者や日本語教師の方々にはインターネット検索が有効です。

『OL』は『週刊女性自身』(光文社)1963年11月25日号で、それまでの『BG』に代わって初めて使われました。『BG』に、売春婦という意味があることが問題になり、東京オリンピックを翌年に控えて、世界各国から人を招くのにふさわしくないという空気がありました。NHKが63年9月に『B

G』を放送禁止用語にしたこと、それに呼応するように『週刊女性自身』が新しい用語を募集し、一番支持が多かった『OL』を採用することに決めて、11月25日号で発表したというのがいきさつです。

この『OL』は誕生して今年で40年になり、国語辞典にも登録されてすっかり一般語になっていますが、作られた当時は、あこがれだったそれまでの丸の内のBGに代わってOLが若い女性のあこがれの的になりました。

しかし、40年も経過するうちに、OLの社会的な位置づけや周延的な語義も変質して、先に紹介したジェンダーの問題としても扱われるようになったのです。

流行語の研究

流行語を研究対象とすると、すでに述べたように、世相との関係が大切になります。一般語はいわば空気のような存在で、世相との関係は直接的には出てきません。しかし、流行語及びそこから一般語になったものは、世相との関係を視野に入れて理解する必要があります。世相はとらえにくいものですが、その中で人々が暮らしていますので、流行語と世相と人々との相関関係をとらえてみるのは意義のあることです。

人とのかかわりを視野に入れると、微視的ですが、理解が深まると思われれます。普通は巨視的な観点から研究するのですが、流行語を使う人と使わない人、知っている人と知らない人、同じ世相の中に暮らしていても流行語との距離の取り方が人によって違います。筆者としては、単なる一過性の言葉という視点でなく、具体的な人とのかかわりにおいて流行語をとらえることが必要だと常々考えています。

かつて、『流行語と若者ことば』(『国文学』)、『流行語に見る今の世相』(『日本語学』)を書いていますので、お読みいただくと幸いです。

基本的な参考文献

- 『国文学』1997年12月号 特集 流行語(学燈社)
- 『日本語学』2002年11月号 特集 経済・世相・ことば(明治書院)
- 米川明彦(2002)『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』(三省堂)
- インターネットの検索エンジン
<http://goo.ne.jp/> や <http://www.google.co.jp/>
- 日本新語・流行語大賞
<http://www.jiyu.co.jp/gendai/shingo/shingo.html>
- 広告景気年表
<http://www.dentsu.co.jp/trendbox/adnenpyo/>
- 日本国際教育協会 <http://www.aiej.or.jp/>